

# 書誌学 の 誕生

コンラート・ゲスナー  
『万有書誌』の研究

雪嶋宏一 著

# まえがき

## 書誌との出会い

筆者は大学で東洋史学を専攻して、漢文史料を基礎とした中国および西域の古代史を学んだ。しかし、筆者はさらにその先の東洋と西洋が接触するユーラシアの草原地帯に興味をもち、そこで遊牧を生業にしながらペルシア帝国と戦って古代世界に勇名を馳せたスキタイ（スキュタイ）と呼ばれた人々について勉強した。そのため、毎日早稲田大学図書館に通い、スキタイに関するギリシア語史料やロシア語の考古学文献を読んだ。たくさんの語学辞書と首引きで読むため、辞書や百科事典が備わっていた参考室を利用した。そして、時々大学には所蔵されていないロシア語文献を手に入れるために、参考室からインターライブラリーローンを利用してソ連邦最大の図書館であるレーニン図書館（現ロシア国立図書館）に文献の貸借を依頼して、文献を送ってもらったりしていた。そのため、参考係の皆さんにすっかり覚えられてしまった。参考係の皆さんのおかげで、スキタイに関する卒業論文を第一文学部に提出して卒業することができた。

卒業と同時に、早稲田大学職員の司書職に採用されて、早稲田大学図書館に勤務することになった。最初の配属先がなんと参考係であった。その時の参考係の主任は深井人詩先生であった。参考係の仕事は毎日が勉強の連続で、知らないことばかりが目の前に現れ、自分が何も知らなかったことを思い知る日々であった。

日々の参考係の仕事に加えて、参考室に設置された小さな展示ケースに資料を展示する仕事を主任から命ぜられて、数か月ごとに展示替えをすることになった。展示テーマを決めることから始まり、図書館カード目録を検索してテーマに沿った資料を見つけては、書庫から取り出して、資料1点1点に解説をつけて、展示する仕事であった。資料について困っていると、時々深

井先生はこんな目録があって、このような資料があるということを教えてくださった。そして、展示と同時に展示資料の目録を作成する仕事も私の任務であった。図書館に入職して日が浅い私には目録をどのように編集したらよいのかまったくわからなかったため、その都度深井先生に指導を仰いだ。目録をどのように作成するのか、書誌事項をどのように調べて記述するのか、深井先生から手取り足取り教えていただいた。そして、作成した展示目録は深井先生の御尽力で『早稲田大学図書館月報』に掲載させて頂いた。

深井先生は、ずいぶんと忙しい方で、図書館員、研究者、書店さん等が頻繁に面会に訪れ、先生ご自身も仕事が終わると様々な会に参加され、またご自身で書誌作成分科会を主催されていた。さらに、その間にフィールドワークと称して、書店や取次を巡り、書誌を探し出して『日本古書通信』に毎月発表するという途方もない仕事を続けておられた。そして、日外アソシエーツから『人物書誌索引』を刊行し、さらに『主題書誌索引』へと続いた。私の参考係の仕事はわずか2年であったが、このような図書館人としての深井先生の仕事を毎日見ていたことは、私にとっては人生を左右するほどの経験であった。参考係の仕事の中で私は書誌を知ること、読むこと、編集すること、発表することについて深井先生から教えていただいた。

## 書誌学へのアプローチ

書誌と書誌学は英語ではbibliographyという同じ言葉である。書誌はbibliographiesという複数形があるが、書誌学は当然のことながら常に単数形である。私が書誌学について考えるようになったのは、その後資料管理課へ異動してからである。私は洋書の受入を担当することになり、様々な言語の資料の新刊情報に目を通し、洋書の専門書店が持ち込む多様な新刊書や古書を見て、それらを調べる仕事を日々行った。当時はバブル景気で日本社会が浮足立っており、図書館にも予算が回ってきていた。私は日々目の前を通り過ぎる貴重書に目を見張った。持ち込んだ書店はそれがいかに貴重か、あるいは稀覯かを強調していた。時には教科書に出てくるような名著、初版

本があり、驚くばかりであった。このような本を誰が読むのだろうかと最初は疑っていたが、自分で一つ一つ調べるようになってからは書物としての価値に思いを馳せるようになった。当時図書館が収蔵したオックスフォード大学出版部古版本コレクションとケンブリッジ大学出版部古版本コレクションの受け入れに携わったことが私にとっての書誌学の入門となった。一冊一冊現物を手に取って、それらの書誌をカードに記述していった。英米目録規則(Anglo-American Cataloging Rules)の古書目録規則が発表されてまだ日が浅く、規則に基づいて目録を記述する方法を図書館の仲間と一緒に学習した。しかし、わからないことだらけであり、しかも誰にも教わることができなかった。その時出会った本がギヤスケル(Gaskell, Philip)『新書誌学概説』(A New Introduction to Bibliography)<sup>1)</sup>であった。当時の私には、この本を読んで理解するだけの知識がなく、そこに述べられている書誌学を理解することはむずかしかった。

その頃思いがけず出会ったのが15世紀から16世紀にかけてヴェネツィアで活躍した学匠印刷家アルド・マヌーツィオ(Manuzio, Aldo, 1450頃-1515)であった。アルドは古代ギリシア語文献を読むことができるようにするために、写本を探して、テキストを校訂し、印刷出版する活動を行った。アルドは、私の長年の疑問であった古代ギリシア語文献がなぜ今我々が手軽に読むことができるのかという問いに答えてくれるうってつけの人物であった。そこで、アルドについて最も重要な研究であるラウリー(Lowry, Martin)の『アルドゥス・マヌティウスの世界：ルネサンス・ヴェネツィアのビジネスと学識』(The world of Aldus Manutius: business and scholarship in renaissance Venice)<sup>2)</sup>を読み始めた。通読するにも時間がかかり、しかも知らないことだらけなので何度も読み返して、そこに登場する人物と書物を調べた。そして、アルドの活動の意義と同時代のヴェネツィアの印刷出版業の繁栄について知るところと

<sup>1)</sup> Gaskell, Philip, *A new introduction to bibliography*, Oxford: Oxford University Press, 1974.

<sup>2)</sup> Lowry, Martin, *The world of Aldus Manutius: business and scholarship in renaissance Venice*, Oxford: Blackwell, 1979.

なり、アルドの本を実際に手に取ってみたいと思うようになった。たまたまイギリスに仕事で出張する機会があり、ロンドンの英国図書館でアルド印刷所の出版物を目にし、訪問した古書肆でその現物に触れることができた。

そして、アルドが活動した前半の時代である15世紀に印刷された書物をインキュナブラ（インキュナビュラ、インクナブラ、揺籃期本）(incunabula)と呼ぶことを知り、わが国にどれほどのインキュナブラが所在するのか調べた。国内の所在調査は20年以上前に行われたが、その後は誰も調査していなかった。しかも、その調査はアンケート調査であり、現物を一つ一つ確認して、版の同定、現物の状態、来歴などを記録するものではなかった。私は国内所蔵のインキュナブラの全国調査を行うことを考えたが、どのように実行するのか、どのように現物を見たらよいか、見当がつかなかった。この悩みを深井先生に相談すると、「あなたが自分で調査しなさい。他にだれができますか。」とおっしゃられた。その時、私は背中を押されたと感じた。この言葉が私を書誌学に向かわせることになった。

そして、早稲田大学図書館所蔵のインキュナブラを手始めに、過去の調査ですでに所蔵が知られていた慶應義塾図書館、一橋大学社会科学古典資料センター、天理大学附属天理図書館を訪問して、所蔵するすべてのインキュナブラを見せていただいた。しかし、そこに一抹の不安があった。版の同定はどのように行うのか、現物の状態をどのように記述するのか、装訂はどのように識別するのか、手で書きつけられた旧蔵者のサインを読み解くことができるのか。そのため、私は調査の際に事前にどのような版を所蔵しているのか推定して、大英博物館の15世紀印刷本目録<sup>3)</sup>とドイツで刊行されているインキュナブラ総合目録<sup>4)</sup>等の該当部分をコピーして持参し、現物と目録の書誌記述が正確に照合するかどうかチェックしていった。この作業の中で、書誌記述の一つ一つの要素とその意義を実践的に学んだ。さらに、1989年から

1990年にかけて筆者は早稲田大学職員研修制度で、英国図書館等でインキュナブラと書誌学を研修することができた。その間になるべく多くのインキュナブラを見て、書誌の作成の仕方を学び、装訂に関しても専門家から様々な見分け方を教えていただいた。帰国後にその学習成果を活用して、私立大学図書館協会と町田市立国際版画美術館から研究助成金を頂いて、インキュナブラの全国調査を進めた。こうして、随所にミスが目立つものの『本邦所在インキュナブラ総合目録』<sup>5)</sup>をなんとか刊行することができた。以前の国内所在点数の数倍ものインキュナブラが図書館等に所蔵されていることが判明した。

一方、図書館勤務の傍ら、本書のテーマとなるゲスナー『万有書誌』(Bibliotheca universalis)がアメリカの古書肆のカタログに掲載されていることを知り、すぐに図書館に相談すると、購入の判断が下され、やがて現物がアメリカから到着した。これが書誌学の基礎となる本かという感慨が溢れた。しかし、そこに何が書かれているのか誰も正確に説明してはくれなかった。

早稲田大学教育学部の図書館司書資格関連授業の中で深井先生が担当されていた図書館学III(書誌解説)を受け持つことになり、様々な書誌を学生に解説する中で、日本、中国、西洋の書誌の歴史をまとめて、ゲスナー『万有書誌』にも言及することができた。

その後、明治大学図書館を会場にして図書館員や製本家、古書店等に書誌学を紐解く講座を始めた。ギャスケルの『新書誌学概説』をテキストに少しずつ読み進めて行くものであり、1年かけて1800年までの古版本に関する部分を読んで、現物の古版本を見ながら学習していった。私にとっても書誌学の大変良い勉強の機会になった。その傍ら、書誌学を学べば学ぶほどに、私は書誌学はどのようにして成立したのかという疑問に立ち帰っていった。その結果、『万有書誌』に再び目を向けることになった。そして、『万有書誌』を読み、すべての項目をパーソナルコンピュータに入力して、ゲスナーが記述した印刷本の情報を15-16世紀印刷本のデータベースを参照して版を確認

<sup>3)</sup> The British Museum, *Catalogue of books printed in the XVth century now in the British Museum*, London: Printed by order of the Trustees, sold at the British Museum, 1908-2007.

<sup>4)</sup> *Gesamtkatalog der Wiegendrucke*, Leipzig: K.W. Hiersemann, 1925-

<sup>5)</sup> 拙著『本邦所在インキュナブラ総合目録』、雄松堂出版、1995.

していく作業を続けていくうちに、ゲスナーがどのような版を実際に見て、どのようにしてその本の書誌記述を作成して、このような大部な書誌を編纂したのか、そして、どのようにして書誌学を確立していったのかを実証しようと考えて、研究を行った。その結果、ゲスナーは、今我々が印刷本の書誌情報を作り目録を編纂する方法それ自体を考案して、書誌学を確立したことが明らかになった。それはかつて深井先生から教わった方法の原初的な姿であったのである。

以上のような筆者の経験と研究に基づいて、本書ではゲスナー『万有書誌』を紐解いていき、ゲスナーは其中で何を成し遂げたのかということを実証的に明らかにしていきたい。そして、ルネサンス時代の最高の知識人の一人であるゲスナーの頭の中に蓄積されていた知識の諸層を示すことができれば幸いである。

## 目次

まえがき	3
序章 活版印刷術と書誌学	13
第1節 活版印刷術の誕生	14
第2節 西洋書誌学の淵源と発展	18
第3節 西洋書誌学の領域	25
第4節 本書の目的と構成	32
第1章 コンラート・ゲスナーの生涯	37
第1節 コンラート・ゲスナーの伝記について	38
第2節 第1期 幼少年期	41
第3節 第2期 留学時代	43
第4節 第3期 学者としての前半期	49
第5節 第4期 学者としての後半期	55
第2章 コンラート・ゲスナー『万有書誌』の研究史	61
第1節 コンラート・ゲスナー『万有書誌1』の研究の経緯	62
第2節 『万有書誌2』および『万有書誌3』に関するこれまでの研究	66
第3節 我国におけるゲスナー受容と研究	68
第3章 ゲスナー『万有書誌』の体系	73
第1節 『万有書誌1』の書誌解題	74
第2節 『万有書誌2』および『万有書誌3』の書誌解題	77
第3節 『万有書誌4』および『万有書誌簡略版』の書誌解題	84
第4章 『万有書誌1』の印刷ヴァリエントについて	89
第1節 早稲田大学図書館所蔵の『万有書誌1』について	90

第2節	チューリヒ中央図書館所蔵の『万有書誌1』について	97
第3節	『万有書誌1』の印刷事情	106
第4節	小結	110
第5章	『万有書誌1』に収録された著者とその情報源	113
第1節	『万有書誌1』に収録された著者名数について	114
第2節	『万有書誌1』に収録されたA-Zの項目数のバランス	119
第3節	『万有書誌1』の情報源	122
第4節	ゲスナーが利用した参考文献	128
第5節	小結	135
第6章	『万有書誌1』の情報源の一例	
	—『アンゲルスの良心問題大全』について	137
第1節	『アンゲルスの良心問題大全』の書誌学的考察	138
第2節	アンゲルス・デ・クラワシオについて	140
第3節	『アンゲルスの大全』について	142
第4節	早稲田大学図書館所蔵『アンゲルスの大全』について	144
第5節	『アンゲルスの大全』の諸版について	148
第6節	『アンゲルスの大全』とコンラート・ゲスナーとの関係	154
第7章	『万有書誌1』の書誌記述要素の起源と成立について	165
第1節	『万有書誌1』に収録された著者の記述方法	166
第2節	図書館所蔵のギリシア語写本への言及	172
第3節	『万有書誌1』に見られる印刷本の書誌記述について	174
第4節	ゲスナーの印刷本の書誌記述の起源に関する緒論	183
第5節	ゲスナーの情報源 I. 分野別の情報源	187
第6節	ゲスナーの情報源 II. 図書館の蔵書および蔵書目録	196
第7節	ゲスナーの情報源 III. 印刷販売書目録	202
第8節	ゲスナーの書誌記述の独創性	214
第9節	小結	217

第8章	『万有書誌1』に収録された印刷本について	219
第1節	ゲスナーの印刷本の書誌記述	220
第2節	『万有書誌1』に収録された印刷本の記述レベルでの範囲	223
第3節	主な印刷業者について	233
第4節	『万有書誌1』に収録された印刷本の著者について	238
第5節	ゲスナーによる印刷本の書誌記述の特徴	241
第6節	小結	250
第9章	『万有書誌1』に収録された印刷本の版の確定	251
第1節	『万有書誌1』に収録された印刷本の版の調査の方法	252
第2節	ゲスナーの記述の正確性	254
第3節	ゲスナーが実際に利用した版	261
第4節	『万有書誌1』に収録された俗語文献	270
第5節	小結	273
第10章	『万有書誌1』に収録されたアルド版について	275
第1節	アルド・マヌーツィオと彼の後継者	276
第2節	ゲスナーによるアルドおよびパオロに関する言及	279
第3節	ゲスナーによるアルド版への言及	281
第4節	パオロ・マヌーツィオの1534年印刷書目録について	284
第5節	ゲスナーによる1534年目録の利用方法	290
第6節	チューリヒのアルド版	293
第7節	『万有書誌1』に収録されたりヨンのグリフ版について	297
第11章	『万有書誌2』および『万有書誌3』の分類体系	305
第1節	ゲスナーの分類体系の系譜	306
第2節	『万有書誌』の分類体系	310
第3節	『万有書誌』の分類の特徴	314
第4節	『万有書誌2』および『万有書誌3』の文献採録方法とその特徴	320
第5節	『万有書誌2』に収録された文献の特徴	323
第6節	小結	326

第12章 『万有書誌』と宗教改革	329
第1節 『万有書誌』のもう一つの特徴	330
第2節 宗教改革とゲスナー	331
第3節 『万有書誌1』に収録された16世紀の著者たち	334
第4節 ゲスナーと同時代の印刷出版業者	346
第5節 『万有書誌』と『禁書目録』	350
第6節 ゲスナーの『万有書誌』執筆の動機	363
第13章 図書館史の史料としての『万有書誌』	367
第1節 『万有書誌』における図書館への言及	368
第2節 ゲスナーが訪問した、あるいは訪問した可能性のある図書館	373
第3節 ゲスナーが訪問していない図書館、あるいは目録のみを利用 した図書館	382
第4節 『万有書誌1』で言及されたその他の図書館	389
第5節 ゲスナーの図書館観	391
第6節 小結	393
終章 書誌学の誕生	395
あとがき	403
図表一覧	406
参考文献一覧	409
索引	421

## 第1節 『万有書誌1』の書誌解題

本書の研究対象となる『万有書誌』はコンラート・ゲスナーが学者となつてもなくの時期に上梓した大部な著作であり、西洋書誌学の礎を築く書物として広く知られ、さらに図書館情報学の古典とみなされているものである。『万有書誌』の全体像を知るために、以下に簡略に書誌学的に解題してみよう。

上述のように『万有書誌1』は1545年9月にチューリヒのフロシャウアー印刷所から刊行された。ウェリシュは、ゲスナーが『万有書誌1』の序文で説明している本書の構想(\*4v-\*6v)について簡潔にまとめている<sup>1)</sup>。それによれば、ゲスナーは『万有書誌』の第1部を著者名目録、第2部を分類目録、第3部を主題索引とする3部の構成の書誌として企画したという。

著者名目録として最初に編纂された『万有書誌1』について以下に書誌解題してみよう。なお、本書では西洋書誌学の規則に従って、本文中の改行位置は| (ヴァーティカルバー) で示し、縮約語 (contraction) 中の省略された綴りは< >で示している。

BIBLIOTHECA | Vniuersalis, siue Catalogus omni=um scriptorum locupletissimus, in tribus linguis, Latina, Graeca, & Hebraica: extantium & non extantiu<m>, ueterum & recentiorum in hunc usq<ue> | diem, doctorum & indoctorum, publicatorum & in Bibliothecis laten=ium. Opus nouum, & no<n> Bibliothecis tantum publicis priuatius in=stituendis necessarium, sed studiosis omnibus cuiuscunq<ue> artis aut | scientiae ad studia melius formanda utilissimum: authore | CONRADO GESNERO Tigurino doctore medico. | [*device*: Vischer 6] | TIGVRI APVD CHRISTOPHORUM | *Froschouerum Mense Septembri, Anno* | M. D. XLV.  
Folio,\*<sup>8</sup>, A<sup>6</sup> B<sup>4</sup>, a-z <sup>2</sup>A<sup>2</sup>B C-Z Aa-Zz 2a-2z AA-MM<sup>6</sup> NN<sup>8</sup>. 650 leaves, ff. [8],

[10], 1-631, [1]. Index in 3 cols.

Ref.: VD 16 G 1698; Vischer C350<sup>2)</sup>.

1(\*1) recto (表、以下rectoはr、versoはvと略)の標題紙にはタイトル、著者名、商標 (device)、印刷地、印刷者、印刷年からなる刊期が印刷されている (図3-1)。ゲスナーはタイトルで本書にどのような書物を収録しようとしているのか明らかにしている。

万有書誌、あるいはラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の3言語によるすべての著者たちの内容の最も豊かな目録：今日に至るまで現存しているもの、現存しないもの、古いもの、最近のもの、学者によるもの、学者でない者によるもの、出版されたもの、図書館に埋もれているもの。  
(\*1r)

商標は印刷業者フロシャウアー (Froschauer) のFrosch「カエル」に由来する「木の下でカエルに跨ったプットー」の図である (図1-6参照)。掲載された商標はフィシャー (Vischer, Manfred) が図示するOffizin Froschauer 6に一致する<sup>3)</sup>。1 verso (裏、以下versoはvと略)には読者への言葉 (AD LECTORES) がある。2(\*2)rから7(\*7)rまでが神聖ローマ皇帝の助言者レオンハルト・ベック・フォン・ベッケンハイムへ宛てたゲスナーによる序文である。ゲスナーは、古代アレクサンドリアの図書館以来近年のハンガリー王コルウイヌスのコレクションに至るまで数多くの書物のコレクションが形成されながら失われてきたことを嘆いている。次に前述の本書の3部構成について述べている。7vにはベック・フォン・ベッケンシュタインの紋章が印刷されている。8(\*8)は白紙葉である。9(A1)rから18(B4)rまでが著者名の

<sup>1)</sup> Wellisch, H. H., How to make an index: 16th century style: Conrad Gessner on indexes and catalogs, p. 10.

<sup>2)</sup> Vischer, M., *Bibliographie der Züricher Früschriften des 15. Und 16. Jahrhunderts*, Baden-Baden : Verlag Valentin Koerner, 1991.

<sup>3)</sup> Vischer, M., op. cit., S. 544.

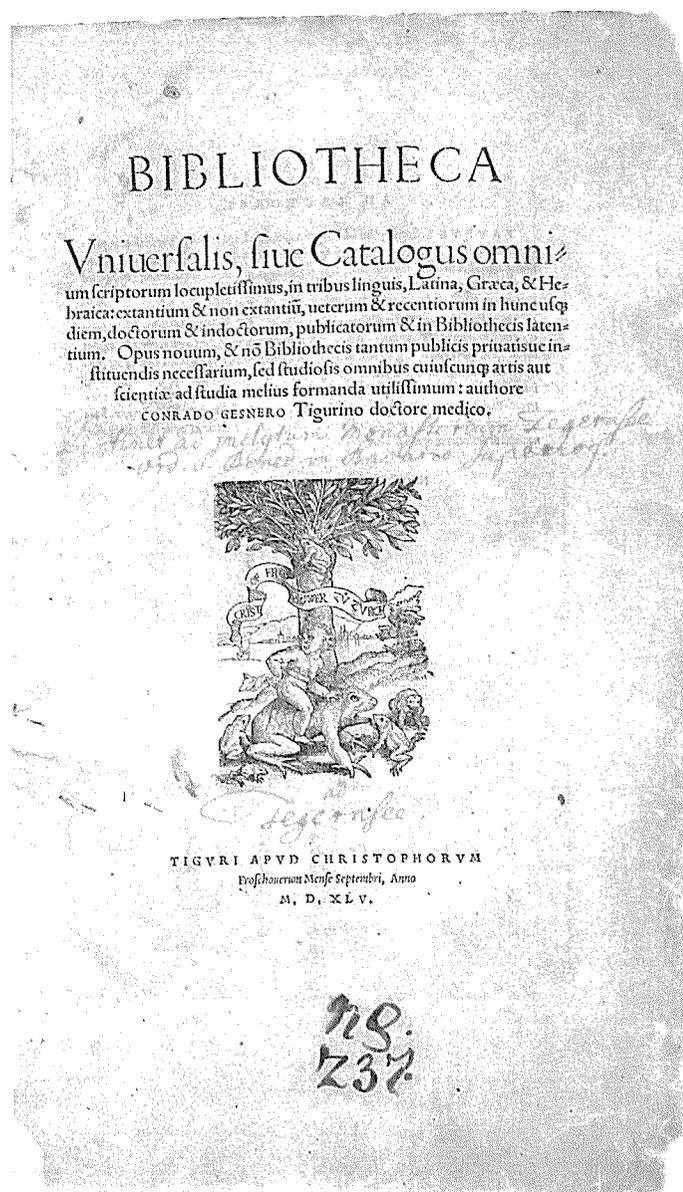


図3-1 「万有書誌1」標題紙 早稲田大学図書館所蔵 (F026-36)

姓あるいは出身地名を見出しとする著者の名前を検索する索引で、3欄組である。18は白紙。19(a1)rから本文が始まり649 (NN7) vまで続き、葉番号(フォリエーションfoliation)が[1]-631まで印刷されている。本文は著者の名・姓のアルファベット順におおよそ配列されているが、正確な配列になっているわけではなく、多少の混乱がしばしば見られる。また、著者名はラテン語の主格か属格の形となるが、その語尾変化の違いは配列上では考慮されていない。最終葉の650(NN8)は白紙葉。

日本国内での所蔵は、慶應義塾図書館、国立国会図書館、広島経済大学図書館、明治大学図書館、早稲田大学図書館の5か所である。なお、ゲスナー自身が所蔵していた本書のコピーはチューリヒ中央図書館(Zentralbibliothek Zürich)に所蔵されている。ゲスナーは全巻にわたってペンにより訂正、削除、追加の書き込みを行い、さらに、他の印刷本から書物の情報を切り抜いたと思われる細片を貼り込んでいた。従って、本コピーはゲスナーの試行錯誤の跡が残された大変貴重な手沢本である。ゲスナーは本書に書き込みを行って情報をアップデートすることで本書の第2版あるいは補遺版の準備をしていたとみなすことができる。

## 第2節 『万有書誌2』および『万有書誌3』の書誌解題

第2部となる分類目録『万有書誌2』と『万有書誌3』は中世初期以来の伝統的なスコラ学の体系の分類に準拠しながら、さらに拡張した21分類からなるものである。『万有書誌2』は1548年にフロシャウアーから刊行された。当初は全21分類を1冊に収録するつもりであったが、第1類から第19類までしか収録することができず、第20類医学と第21類神学は続巻に譲ることになった。以下が『万有書誌2』の書誌解題である。

PANDECTARVM SIVE | Partitionum uniuersalium Con[radi Gesneri  
Tigurini, medici | & philosophiae professo[r]is, libri XXI. | AD LECTORES. |  
SECVNDVS hic BIBLIOTHECAE nostrae Tomus est, totius philosophiae |  
& omnium bonarum atrium atq[ue] studiorum Locos communes & Ordines

# 索引

人名、書名、図書館や大学などの機関名、歴史上の事件などを対象とした。

書誌学・図書館用語には末尾に\*を付与した。

本書のテーマである「ゲスナー」【万有書誌】はほとんどのページにあるため、最低限度に留めた。

## 【あ行】

- アイソポス (Aesopus) (イソップ)  
..... 282
- アウエンティヌス(Aventinus, Johannes,  
1477-1534) ..... 343
- アウグスティヌス(Augustus Aurelius)  
..... 170, 238, 344, 401
- アウグスティン(Augustin, Antonio, 1516-  
1586) ..... 199, 377
- アウクスブルク..... 39, 54, 57, 135,  
136, 197, 199, 220, 228, 263, 368,  
372, 377, 378, 379, 393
- アウクスブルク公共図書館(bibliotheca  
publica Augstae Vindelicorum)  
54, 111, 126, 197, 199, 378, 392
- 『アウクスブルク公共図書館にあるギリ  
シア語書目録』(Catalogus Graecorum  
codicum qui sunt in Bibliotheca Reip.  
Augustanae Vindelicae)..... 200
- アエネアス・シルウィウス  
(Aeneas Syluius, 教皇ピウス2世、イ  
タリア語名Piccolomini, Enea Silvio, 在  
位1458-64) ..... 16, 166, 167, 168,  
344, 345
- アエリアノス(Aelianus)『動物誌』(*Opera,  
quae extant, omnia, Graecè Latinèque  
è regione*) ..... 57, 322, 323
- アグノー (ハーゲナウ) ... 149, 228,  
237, 262
- アグリコラ(Agricola, Georg, 1494-1555)  
..... 15, 401
- アグリッパ (Agrippa von Nettesheim,  
ドイツ語名 Heinrich Cornelius, 1486-  
1535) ..... 323, 343
- 『アステサヌスの大全』(*Summa Astesana*)  
..... 143
- アスト, アステサヌス・デ (Astesanus  
de Ast, イタリア語名Astesano da Asti,  
d. ca.1330) ..... 142
- アーチャー (Archer, Taylor) ..... 67
- アッカデミア・デイ・リンチェイ... 356
- アツリアノス (Arrianus) ..... 213
- アツリヴァーベネ, コルネリオ  
(Arrivabene, Cornelio) ..... 148
- アツリヴァーベネ, ジョルジヨ (Giogio  
Arrivabene, ラテン語名Georgius  
Arrivabenus) ... 138, 144, 145, 148,  
149, 192
- アツリヴァーベネ, チェーザレ

## 著者略歴

雪嶋 宏一（ゆきしま・こういち）

1955年生。早稲田大学第一文学部卒。同大学図書館司書を経て、早稲田大学教育・総合科学学術院教授（図書館情報学、西洋書誌学）。国内所在の西洋15世紀印刷本を研究調査し、さらに16世紀印刷本の近代化の過程を研究。

2017年第19回図書館サポートフォーラム賞受賞。

著書に『Incunabula in Japanese Libraries (IJL2)』（Yushodo Press, 2004）、『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』（雄山閣、2008年）、『アルド・マヌーツィオとルネサンス文芸復興』（東京製本倶楽部、2014年）など。

---

# 書誌学の誕生

—コンラート・ゲスナー『万有書誌』の研究

---

2022年12月25日 第1刷発行

---

著 者／雪嶋宏一

発 行 者／山下浩

発 行 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

---

組版処理／有限会社デジタル工房

印刷・製本／株式会社平河工業社

装 丁／赤田麻衣子

---

©YUKISHIMA Koichi 2022

不許複製・禁無断転載

(中性紙北越淡クリームキンマリ使用)

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

ISBN978-4-8169-2947-2

Printed in Japan, 2022